

建築と庭園の結びつきの視点

—— 森蘊と堀口捨己・西澤文隆の桂離宮意匠論 ——

The viewpoint of the relationship of architecture and garden

—— The design theory of Katsura-Rikyu of Mori Osamu
and Horiguchi Sutemi, Nishizawa Fumitaka ——

田 中 栄 治

キーワード：建築、庭園、結びつき、視点、桂離宮

要 旨

本稿では、日本庭園研究者・作庭家の森蘊と建築家の堀口捨己・西澤文隆のそれぞれの桂離宮意匠論を比較することにより、彼らの建築と庭園の結びつきの視点がどのようなものであったのかを探ることを目的としている。森は、建築と庭園の結びつきの視点を大きく分けて「建築と庭園の関連的合理性」「庭園における建築的意匠」とし、さらに「庭園における間仕切の存在」に言及して建築と庭園の結びつきの視点をさらに発展させていた。堀口は、建築家として写真を通して建築と庭園の結びつきの視点からみた桂離宮の建築と庭園の美を見出していた。西澤は、森の考え方をさらに発展させ、建築と庭園の結びつきの視点から桂離宮の敷地全体を生活のための空間として建築的に捉えていた。

1. はじめに

前々稿（田中 2015）・前稿（田中 2016）では、日本庭園研究者で作庭家でもあった森蘊と、日本庭園の研究を積極的に行った建築家である堀口捨己・谷口吉郎・西澤文隆について、昭和初期から戦後にかけての著作などからそれぞれの関係を探った結果、実作を通しての連繋はないものの、研究面での交流があり、お互いに評価し、影響を与えていたことがわかった。大正期にさかんとなる生活改善のための建築家による住宅改良において伝統的な日本の住宅が持っていた「自然との融和」の見直しが主張され（田中 2006）、それに続く造園家による庭園改造において「戸外の室」として建築と一体的に利用する家族本位・実用本位の庭園の提案が行われた（田中 2012）。さらに、そのなかで住宅における建築と庭園の連繋、建築家と造園家の連繋の重要性が議論されるようになった（田中 2014）。このような時代背景のもと、森と堀口・谷口・西澤の研究に共通しているのは建築と庭園を一体のものとしてとらえ、建築と庭園の結びつきを明らかにしようとした点であり、新しい住宅における建築と庭園をつくり出すための創造的研究であった。

本稿は、彼らの研究が持っていた建築と庭園の結びつきの視点がどのようなものであったの

かを探ることを目的としている。特に森と堀口・西澤が戦後にそれぞれ桂離宮に関する著書を出版していることに着目し、彼らの桂離宮意匠論が桂離宮の建築と庭園をどう評価し、そこにどのような建築と庭園の結びつきの視点がみられるのか比較し明らかにする。また、彼ら以前の桂離宮意匠論についても合わせてみることで、昭和期の戦前戦後を通して建築と庭園の結びつきの視点がどのように変化していったのかを明らかにする。

2. 建築と庭園の結びつきを求めて

具体的に森蘊と堀口捨己・西澤文隆の桂離宮に関する文章の内容を考察する前に、彼らが建築と庭園の結びつきの視点を持つに至った経緯を簡単にみておくこととする。なお、森と堀口・西澤の交流については前々稿（田中 2015）、森の特に桂離宮研究のきっかけとなった東京工業大学との関わりについては前稿（田中 2016）に詳しく記した。

2-1. 森蘊

森蘊（1905-1988）は、日本建築学会の機関誌『建築雑誌』1983（昭和58）年9月号に「建築と庭園の結びつきを求めて」と題した文章を掲載しているように、生涯建築と庭園の結びつきを求めて庭園研究と造園設計を行なった。

森の建築と庭園の結びつきへの興味は学生時代につくり出されている。1929（昭和4）年4月に東京帝国大学農学部農学科に入学した森は、まもなく受講した田村剛の造園学に強くひかれた^{注1}。森は田村の講義を聞き続けると同時に、田村に紹介状を書いてもらって京都府庁社寺兵事課や宮内省京都事務所に外向き、京都の社寺や桂離宮、修学院離宮、京都御所、仙洞御所、二条城などの庭園を見て回っている^{注2}。森はそのなかで、日本庭園を研究する上での建築の知識の必要性を感じ、東京工業大学教授の前田松韻の研究室に出入りするようになる。前田は森に寝殿造系住宅における建築と庭園の研究は両方の専門家が手を取りあって進むべきであると説明した^{注3}。これが後に森の寝殿造系庭園の研究、ひいては建築と庭園の結びつきの研究につながっていくことになる。

さらに、森は田村を通して藤島亥治郎に許可をもらい、1931（昭和6）年4月から東京帝国大学工学部建築学科の聴講に通いはじめている^{注4}。森は、伊東忠太の東洋建築史、関野貞の朝鮮建築史、塚本靖の日本工芸史、内田祥三の都市計画、岸田日出刀の建築意匠、藤島亥治郎の日本と西洋の建築史などを聴講した。また、1932（昭和7）年には北村耕造・前田の紹介で日本建築学会に入会して積極的に活動を行なった。さらに、1938（昭和13）年には足立康と大岡実が主催していた建築史研究会に入会している。

その後、森は大学卒業後に田村が指導していた内務省衛生局に勤務しながら研究を続け、戦後の1947（昭和22）年8月から国立博物館調査員となり、保存修理課で文化財保護に携わる。



図1 森蘊
（森蘊門下生一同 1989 口絵）

1949（昭和24）年6月に文部技官となり、1950（昭和25）年の文化財保護法成立により文化財保護委員会が設立され、修理課は同委員会の建造物課となった。1952（昭和27）年4月に奈良国立文化財研究所が新設されると、森は建造物研究室の初代室長に就任した。

森は1936（昭和11）年頃からしばしば桂離宮の实地踏査を試み、1941（昭和16）年の日本学術振興会学術奨励金下附により本格的に桂離宮の研究を開始し^{注5)}、さらに1950（昭和25）年度には文部省科学研究費の助成を受けている^{注6)}。これらの研究の成果は終戦後の1951（昭和26）年に創元社から出版された森の著書『桂離宮』にまとめられている。また1953（昭和28）年には学位請求論文『桂離宮の研究』を提出し、東京帝国大学農学部農学科出身ながら東京工業大学から工学博士の学位を授与される。森の学位請求論文は、一部構成を変更し加筆して1955（昭和30）年に東都文化出版から『桂離宮』として出版されている。

1960（昭和35）年5月に「中世庭園史の研究」により日本建築学会賞、1970（昭和45）年3月に「桂離宮他日本庭園史に関する一連の研究」により日本造園学会賞、1987（昭和62）年5月に日本造園学会上原敬二賞と、日本建築学会と日本造園学会の両方の学会賞を受賞している。1967（昭和42）年に奈良国立文化財研究所を退官したのちは京都市に庭園文化研究所を設立し、各地の歴史的庭園の発掘・復元を行うとともに、寺院や住宅などの庭園の設計も行なった。

このように、森は建築界と造園界の両面において精力的な活動を行い、生涯建築と庭園の結びつきを求めて庭園研究と造園設計を行なった。

2-2. 堀口捨己

堀口捨己（1895-1984）は森より10歳年上である。堀口は茶室建築・茶庭の研究から日本的なものに興味を持ち、自身の作品集を「家と庭の空間構成」と題するように、自然と庭園と建築が一体となった空間構成の美を追求した建築家である。

堀口は1932（昭和7）年に発行された『建築様式論叢』のなかの「茶室の思想的背景とその構成」や、『思想』1934（昭和9）年5月号に発表した「建築における日本的なもの」により、茶庭と茶室建築を研究するなかで、茶の湯を日常生活の形式を借りて美を求める芸術であるとして「生活構成の芸術」と呼び、庭園・建築及び器具、さらに人までを含めた構成の仕方を考察することにより、そこに庭園と建築が一体となった空間構成としての「合目的の美」を見出した。1941（昭和16）年には『利休の茶』により北村透谷賞を受賞している。

また、堀口により『畫論』第十八號に発表された「洛中洛外屏風の建築的研究」（1943）では、洛中洛外屏風絵の中の建物が写實的に表現されていることを検討し、その中に描かれた建物の時代を考察したうえで、内裏・將軍邸・管領邸などを詳細にみることで、寝殿造から書院造への変遷を明らかにすることを試みている。それにより、堀口は洛中洛外屏風絵が絵画史の上だ



図2 堀口捨己
(稲垣他 1996 p.2)

けではなく、建築史の立場からも見逃すことができない史料であることを立証した。その後、森はこの堀口の研究に刺激されて洛中洛外屏風絵の細川管領邸や二条押小路殿の復元的研究を行なっている。堀口という建築家により行なわれた研究の方法が、その後の森という庭園研究者の研究方法に影響を与えていた。

堀口は1944（昭和19）年に『書院造りと数寄屋造りの研究 —主として室町時代に於けるその発生と展開について』により工学博士の学位を授与されている。終戦後、1946（昭和21）年に東京大学第一工学部講師となり、1949（昭和24）年2月から明治大学教授となる。1950（昭和25）年に『利休の茶室』により日本建築学会賞（論文賞）、1951（昭和26）年に八勝館八事店御幸の間により日本建築学会賞（作品賞）を受賞している。また、1953（昭和28）年には『桂離宮』により毎日出版文化賞、1957（昭和32）年には建築芸術に尽くした功績により日本芸術院賞を受賞している。1966（昭和41）年に勲三等瑞宝章を受章し、1970（昭和45）年に日本建築学会大賞、および八勝館中店で第1回中部建築賞を受賞している。

森は『日本庭園史話』のなかで「日本庭園史学をはじめた人たち」のひとりとして建築家・堀口捨己を挙げている^{注7)}。森は堀口を著名な設計者であるとともに茶室建築研究はそれ以上に評価されているとし、また建築設計の際には自分で庭園を設計し、現場指導すると紹介している。特に、森は堀口が1965（昭和40）年に出版した『庭と空間構成の伝統』について、「この本は文献的な面でもみごとであるが庭園を美しく作るという抜群の鋭い意識が作用しているので、その資料の扱い方にどこから見ても素晴らしいものが感ぜられる」（森 1981 p.8）とし、堀口の日本庭園研究について、特に創作者としての視点を高く評価している。さらに、堀口は1974（昭和49）年に出版した自身の作品集のタイトルを『堀口捨己作品・家と庭の空間構成』とするなど、研究と設計の両面で建築と庭園が一体となった空間構成の美を追求し続けた。

2-3. 西澤文隆

西澤文隆（1915-1986）は森蘊より10歳年下である。西澤は庭園の研究、特に日本の伝統的な庭園の実測を通して建築と庭園の相互関係、空間のつながりや流れを研究し、そこから見出した日本の建築と庭園に特有の「透ける空間」を手がかりに、建築や住宅の設計を行った建築家である。

西澤は堀口捨己と森が校註を担当した横井時冬『日本庭園発達史』を終戦直後一番に読んだ本であるとしている^{注8)}。西澤が本格的に庭園に興味を持ちはじめたのは、当時坂倉準三建築研究所に勤めていた西澤が戦後芦屋に住んで大阪で仕事をするようになり、日曜毎に京都に見学に出かけ、庭園を歩きまわりながら写真を撮るようになってからである^{注9)}。その後、西澤は1953（昭和28）年頃から森蘊と親交を持つようになり、さらに日本庭園への興味を強くしていく^{注10)}。



図3 西澤文隆
（新建築社 1999 p.172）

1966（昭和41）年に美術出版社から「建築と庭園の関わり」についての本を出すことを依頼されたことをきっかけとして、西澤は庭園の実測をはじめることになる^{注11)}。西澤の実測図は「透ける空間」という西澤の考える日本の建築と庭園の本質を、実測時点での状況から描き出そうという試みであった。実測にあたって西澤は森から実測図の提供を受けたり、森の著作から拡大トレースを行なって、実測のためのベース図面をつくっている^{注12)}。

1974（昭和49）年に『西澤文隆小論集1コートハウス論』、1975（昭和50）年に『西澤文隆小論集2庭園論I』、1976（昭和51）年に『西澤文隆小論集3庭園論II』『西澤文隆小論集4庭園論III』をそれぞれ出版しており、そこでも森から庭園図面の提供を受けている。西澤の庭園論は数冊の増刊が出版される予定であったが、実際に出版されたのは庭園論IIIまでである。また、日本庭園の実測、庭園論の出版と並行して、西澤はコートハウスに代表される敷地全体を生活空間ととらえた建築と庭園の結びつきのある住宅を数多く設計した。

日本建築学会の機関誌『建築雑誌』1978（昭和53）年10月号に掲載された「私の感銘の受けた図書」のなかで、西澤は森の『平安時代庭園の研究』を取り上げ、「該博な知識の海の中に浸りながらものをつくる喜びが味わえる筆力と構築力は氏自身がつくる立場を忘れていない証拠のように思われる」（西澤 1978b p.7）と高く評価している。

また、堀口が1965年に『庭と空間構成の伝統』を出版した時に、西澤はそれが建築家の著した庭園書として自然と庭園と建築が一体となって空間構成を現成するという点がいまままでの庭園書には存在しなかった部分であるとして高く評価している^{注13)}。

3. 桂離宮意匠論の変遷

森蘊によると、桂離宮の造営年代や作者に関する歴史的研究とは別に、桂離宮の構想や表現に関する意匠論にはドイツの建築家ブルーノ・タウトの来日が大きく貢献したとしている。タウトの来日は1933（昭和8）年5月であり、約3年半日本に滞在した^{注14)}。タウトは来日した翌日に桂離宮に案内されている。その後、タウトは1934（昭和9）年に日本語訳が出版された著書『ニッポン』のなかに「桂離宮」という文章を発表し、森はそれについて「多くの人達に読まれるようになって桂離宮の価値認識が急激に高まり、建築家や造園家だけでなく、美術関係者は勿論のこと、あらゆる國民の注視をあびるようになった」（森 1951 p.218）とし、また日本の建築専門家達の間にも改めて再認識が行われたとしている。



図4 桂離宮配置図
(森 1955a p.28)

森の挙げているところでは、タウト以前には建築造形意匠研究者で東京帝国大学教授の岸田日出刀の『過去の構成』の中に桂離宮が取り上げられている。また、タウト以降には、1942（昭和17）年6月に美術評論家で日本大学教授であった柳亮の著書『日本美の創生』の中で桂離宮が取り上げられ、また1945（昭和20）年1月には建築史家で東京帝国大学教授であった藤島亥治郎の著書『桂離宮』が出版されている。

本稿は、森と堀口捨己・西澤文隆の桂離宮意匠論のなかで建築と庭園の結びつきの視点がどのように取り上げられているのかをみるが、その前にまず岸田やタウト、柳、藤島の桂離宮意匠論を確認した上で、森と堀口・西澤の桂離宮に関する著書について考察することとする。

3-1. 岸田日出刀の桂離宮意匠論

1929（昭和4）年に出版された岸田日出刀の『過去の構成』は、岸田が集めたり、撮影したりした建築や文様や彫刻などの写真をまとめたものであり、岸田はこの本を建築の歴史的研究書でも正しい参考書でもないとしている^{注15)}。

過去の日本の建築、より適切には過去の日本の造形藝術の全般に涉り、現代人の構成意識とも言ふべき観点から眺めやうとしたものである。[…中略…] 現代人としての自分を何等かの點で啓發してくれる造形上なり或は構成上なりのエッセンスともいふべきものを、さういう過去の日本の建築その他から見出したいと思つてをる（岸田 1929 自序）

岸田は伝統的な日本建築に近代建築に通じる造形上あるいは構成上のエッセンスを見出そうとしている。岸田は『『モダン』の極致を却つてそれら過去の日本建築その他に見出して今更らに驚愕し、胸の高鳴るのを覚える者は決して自分丈けではないと思ふ』（岸田 1929 自序）とし、日本の伝統的な建築を「架構とポジションの建築である」（岸田 1929 自序）としている。岸田はこの本によって「現代人として過去の日本の造形藝術を如何に見るか」（岸田 1929 自序）に対する解答を示そうとしており、日本の伝統的な建築をモダニズムの視点から捉えようとしている。岸田は『過去の構成』の中で桂離宮を取り上げ、古書院・中書院・新書院からなる書院建築と庭園の配置と構成に着目している。

古書院・中書院・新書院一團となつて構成されたこの建築は、見る度毎に新たな感激と啓示を與へてくれる。[…中略…] 敷石もよい、それを愛撫してゐるやうな苔並みもよい。正面の玄関の構成は更らによい。左の築垣のくぐりを入ると御庭に出て、月見臺に通ずる。古書院から中書院、新書院と順々にかぎの手に折れ曲つた南の庭側の配置も驚く程見事である（岸田 1929 p.52）

岸田は桂離宮の書院建築と庭園の両方についてその造形と構成を高く評価していたことがわ

かる。一方で、建築と庭園の結びつきの視点については言及されていなかった。

なお、森蘊は学生であった1931（昭和6）年4月から東京帝国大学建築学科での岸田日出刀の建築意匠の授業を聴講していた。その時に、森が日本の伝統的な建築と庭園をモダニズムの視点から捉えようとする岸田の考えに触れていた可能性がある。

3-2. ブルーノ・タウトの桂離宮意匠論

1934（昭和9）年に出版されたブルーノ・タウトの『ニッポン』のなかに「桂離宮」という文章がある^{注16}。この中でタウトが来日した翌日1933（昭和8）年5月4日に桂離宮を訪れた時の印象を「パルテノンに比肩すべきもの」（タウト 1934 p.23）と絶賛した上で、機能主義の立場から見ても現代的である点を高く評価している。

桂離宮と其の庭園、それは堅強な一単位をなして、[…中略…] 茲處では機能主義が満されてゐる。近代建築家なら驚異の眼を見はつて少くとも、手つ取り早い簡単な方法で種々な要求が満されてゐる點で、此の建築の絶対近代的な事を認めるであらう（タウト 1934 p.26）

タウトは桂離宮の建築と庭園を統一体であるとし、桂離宮の実用的で近代的な面を評価している。その上で、タウトは桂離宮が「本来の生活が要求する段となれば、単なる効用といふ點だけでは満足してゐないのだ」（タウト 1934 p.27）としている。そして、タウトは古書院からの庭の眺めについて以下のように記している。

先づ障子を締めきつた際の部屋の静かな事と、それを押し返した場合庭の『景色』が家屋の一部として突如毅然として出現する事とである。それは宛も、すべての壁面が唐紙の金銀梨地に於て最も強く照り返される庭の反射を豫期してゐるかと思はれるほど、室内にとつては支配的なものなのだ（タウト 1934 p.30）

タウトは桂離宮の室内の意匠が庭の光の反射に配慮してつくられているとしている。ここには、建築と庭園の結びつきの視点がみられる。また、タウトは桂離宮では月見台からのみ池景のある庭園全体が見渡されるとし、「此處からは池を含めて庭全體を見透す事が出来、涙ぐまじきばかりの美景である。[…中略…] 此の庭園を理智で分析せずに、吾人は此處に於て此の庭園の藝術が、人間的交流と相互關係とを實にリファインされた形式で再現してゐるのを感じる」（タウト 1934 p.35）として、桂離宮の美は人間的交流と相互關係の美であるとしている。さらに、タウトは桂離宮の庭園について「最も偉大な多面性が現れてゐる。其處には無数の關聯が表出されてゐるのを感じるのみだ」（タウト 1934 p.36）としている。ここで多面性とは、古書院からの庭全体の眺めに反して、新書院に面する芝生と樹木とがあるだけの庭から笑意軒さらに園林堂周辺の造園芸術の一端をもうかがうことができない簡素な庭園と、松琴亭への道を辿

る時とさらにその先に歩を進める時の複雑な庭園との対比を指している。そして、タウトは「これら庭の各部の多面性はすべて一個の単位へと結合されてゐた。それは絶対に装飾的でなく、精神的意味に於ける機能的に一つの美が達成されてゐた」(タウト 1934 p.38) としている。

タウトの桂離宮に対する多面性と無数の関連の美という考え方は、1934(昭和9)年に書かれ、日本語訳が1946(昭和21)年に出版されたタウト著作集第一巻『桂離宮』に収められた「日本建築の世界的奇蹟」^{注17)} という文章の中にも書かれている。

建築の世界的奇蹟たる桂離宮の御殿とその御庭とは、多くの関係の融通無礙な結合を表現する。個々の部分がそれぞれ具有する独自の力、その完全な自由と獨立とは、それにも拘らず鞏固な鎖のごとく渾然たる全體的統一を形成してゐる (タウト 1946 pp.46-47)

ここに出てくる個々の部分としてタウトは以下のものをあげている。

林泉の間を通つて茶室(松琴亭)に赴く道は哲學的準備である
(タウト 1946 p.48)

古書院の月見臺に立つと、林泉の全體はあたかも饗宴のやうに眼前に展開する
(タウト 1946 p.49)

新書院の御庭には、見事な芝生とこれをめぐる樹木とを見るのみで、[…中略…]
これほど簡素な、また聊かも『たくまぬ』御庭はほかのどこにも見出し得ないであらう (タウト 1946 pp.49-50)

これらのうち、タウトは新書院の庭について鞠場などとして使われた空間であったという歴史的経緯を知らなかったということはあるが、そうであっても、タウトが桂離宮の庭を上記の三形式に分類し、そこに多面性と無数の関連の美を見ていたことがわかる。また、1936(昭和11)年に書かれ、日本語訳が同じくタウト著作集第一巻『桂離宮』に収められたタウトの「永遠なるもの」^{注18)} という文章にも桂離宮の庭の三形式が書かれている。

いつたい桂離宮の林泉の秘密はどこにあるのだらうか。この秘密は、桂の御庭のもつ異なつた三形式がそれぞれ所求の目的を實現してゐるところにあるのだ。日

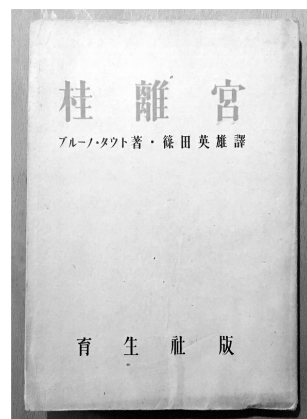


図5 ブルノ・タウト『桂離宮』
育成社
1946(昭和21)年(筆者撮影)

常生活が他奇なく営まれるところでは、庭もいはば実用的なもの、有用なものとして最高の洗練を示してゐる。禪の思想に出づる峻厳な形式は茶室に通ふ路で精神の志向があらかじめ用意せられねばならぬところにおいてのみ用ゐられてゐる。中門から斜に庭苑を眺めた時にも、小瀑の見える田園詩的な橋にも、希峭な哲學的要素はまだひとつも現はれてゐないのである（タウト 1946 pp.65-66）

その一方で、タウトは「日本建築の世界的奇蹟」でも桂離宮の実用性・有用性に触れている。

然し桂離宮は、精神的要求を充足してゐるばかりでない、実用的・有用的な方面をも剩さず包括してゐるのである。日本家屋の本質と、日本の風土・生活及び建築方法から必然的に生じた種々な前提とを聊かでも認識した人は、有用といふ意味における機能が桂離宮において間然するところなく發揮せられてゐるのを見て驚嘆するであろう。どこを見ても、『これ以上の簡素を求めることは不可能である』と言はざるを得ない（タウト 1946 p.47）

このように、タウトの桂離宮意匠論は、桂離宮の建築と庭園を統一体であるとしながら、そのなかには桂離宮の庭園の持つ異なった三形式に分化しつつ、それにもかかわらず庭園全体の渾然とした統一を形成しており、そこにタウトは多面性と無数の関連の美を見出している。さらに、桂離宮の建築と庭園の実用性・有用性を機能主義の立場から見ても現代的である点を高く評価している。

ところで、タウトの桂離宮意匠論では新書院の庭園および笑意軒の建築とその周囲の庭園に対する評価が少しずつ変化している。1933（昭和8）年に書かれた「桂離宮」では、『造園藝術』など其の片鱗だに見當らず、すべてが芝生と果樹のある獨逸の農家の庭を想はせるのである。[…中略…]茶室から先の道、即ち茶の湯のすんでからの道はむしろ庭を貫く普通の逍遥道（タウト 1934 pp.36-38）であるとしてタウトの評価はあまり高くない。一方、1936（昭和11）年に書かれた「永遠なるもの」では、「これは日本の造園術に特有なモチーフの脱落を意味する。[…中略…] 私は日本の建築家達があの茶室のやうな精妙にして模倣を許さぬ傑作に手出しをしないで、ここに見るやうな様式をこそ丹念に模倣してくれたらと思ふ」（タウト 1946 p.65）としてタウトは日本の建築家が模倣すべきものであると評価している。

3-3. 柳亮の桂離宮意匠論

1942（昭和17）年に出版された柳亮の著書『日本美の創生』の中に「眞の飛び石 桂離宮の覚え書から」という文章がある。ここで柳は、「桂一。これは一個の世界観である」（柳 1942 p.187）とし、「これは平野に山莊を出現させようとする苦心である」（柳 1942 p.191）とした上で、桂離宮の性格を以下のように記している。

静から動を導き出そうとするものであつて、これが「桂」の性格であり、桂の設計はすべてそこを出発点としそこへ歸結しようとする構想によつて統一されてゐる（柳 1942 p.191）

「桂」の造形的特質は、一言にして言へば、この「動き」すなはち、「變化」そのものにあると言つてよく、いはゆる端倪すべからざる變通自在の美をそこに現出し創造してゐるのである

（柳 1942 p.193）

「桂」の特質は、動きと變化であると私は言つたが、「桂」の持つ絶對的な價値は單なる動きそのものや、變化そのものにあるのではない、むしろ、かかる變化に應じて、對應を誤らない、その應酬の非凡な技術と遠謀緻密な用意の深さにこそある

日本美の創生

柳 亮

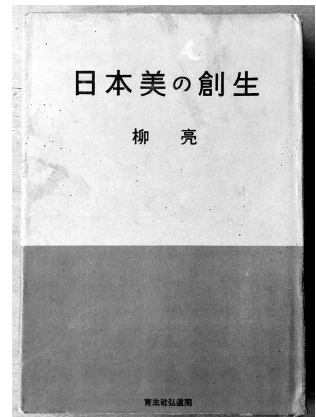


図6 柳亮『日本美の創生』
育生社弘道閣
1942（昭和17）年（筆者撮影）

興寄前庭の青苔の中に斜めに延びる眞の飛石や、段階的に曲折しながらつづら折れに奥へと導かれる御殿の平面計画などの例を挙げて、柳は桂離宮の特質を動きと變化であるとし、それに対応するための高い技術と注意深い用意であるとしている。さらに、柳は『『桂』の御殿の外観上の特徴は、周知の通り、建ちが低く床が高いことである』（柳 1942 p.195）とし、建ちが低いことの理由としては、桂離宮の庭園から書院建築を見た時に外観上山莊の趣を求めていることにあるとしている。

山莊の趣きであつて見れば、建ちの高いことは必要でない、既にそれ自身が高地にあるのであるから、それ以上に二層三層と上へ積み上げることは屋上屋を架すもので無意味でもあり危険でもある。[…中略…] 山莊が建ちを低くし、横に延びようとすることは必然であつて、山嶽的風土を美的風土とする吾々の嗜好が横へ展開し横へ連続する美學を有つたといふことは、決して偶然ではないのである

（柳 1942 pp.195-196）

一方で、桂離宮の床が高いことの理由としては、平野に山莊を出現させようとする時に、御殿内から庭園を見た時の展望をいかに確保するかという苦心から来ているとしている。

「桂」の場合は、その環境は實際は平地の眞中であつて、山中ではない。これは一つの矛盾である。床を普通の高さに造れば、座中の展望が利かない。[…中略

…]ここに於いて、床を高くし視覚を廣くもつといふことが、造形上からも重要なこの御殿の要素となつてゐるのである（柳 1942 p.196）

柳は、庭園から書院建築を見た時に外観上山莊の趣を求めていることと、御殿内から庭園を見た時に山莊らしい展望をいかに確保するか、これらふたつの目的のために桂離宮の御殿の「建ちが低く床が高い」という特徴がつくり出されているとしている。

御殿の建ちが低く床が高いといふことは、二つの目的つまり二つの要求に對應してゐる譯であつて、見かつ見られる、即ち、内から見る美しさと、外から見られる美しさを同時に把握し同時に解決したものに他ならない。[…中略…]私のはゆる發生の條件に置かれた美とはこれである（柳 1942 p.197）

さらに、柳は見かつ見られるということを「主客の意識」であるとし、大陸の物そのものに即した縦の美学に対する日本人の横の美学においては、この「主客の關係の美学」が一層切実であるとしている。

みづから高まらんとする努力をもつ大陸の美學、すなはち縦への美學は、ものものに即して考へられた美學であるが、横に連結せんとする努力をもつ吾々の美學はむしろ主客の關係の美學である（柳 1942 p.198）

柳の『日本美の創生』では、桂離宮を平野に山莊を出現させようとするものであるとし、その特質を動きと変化、およびそれに対応する技術と用意であるとしている。そして、平野に山莊を出現させるためには、見かつ見られるという「主客の關係の美学」が重要であり、桂離宮における「建ちが低く床が高い」という建築（内）から見る美しさと庭園（外）から見られる美しさを同時に把握し同時に解決するという点に建築と庭園の關係への意識をみることができる。ただし、柳の桂離宮意匠論では建築と庭園の結びつきの視点のより具体的な内容には触れられていない。

3-4. 藤島亥治郎の桂離宮意匠論

1945（昭和20）年に出版された藤島亥治郎の『桂離宮』は、桂離宮の建築と庭園の美観をカメラで捉えた「戦時中とは思えぬ豪華版」（森 1951 p.222）であつた。そのなかで藤島は、桂離宮の美は建築と庭園のまとまりにあるとしている。

桂御別業の美は常に新鮮である。且つ、その美は前記のやうに御別業の建築と庭園とが、現状に於いてこの上ない纏まりに於いて、現代人たる私たちを潤ほす
（藤島 1945 p.107）

その上で、藤島は「これは注目すべき重要事であるが、桂の御庭が極めて建築的であることである」（藤島 1945 p.124）とし、桂離宮の庭園が建築的であるとしており、これは岸田、タウト、柳にはみられなかった視点である。具体的には桂離宮の中心的建築である御殿から庭園への移り変わりを挙げている。

第一に、御殿から御庭への移り變りの手法に認められる。古書院に於いては椽の足元から低い土壇の先に、前後を各一列の野石を並べ、内を小砂利で満した浅い雨落溝があるが、その先に更に一列に石を並べて、その内側は苔が蒸し、その外側は天鷲絨のやうな芝地となる。[…中略…] しかもこれらは緑の地面の間に白い帯をなして、椽の折れ曲るに應じて直線的に屈曲してゆく様、まことに建築的である。建築的でありながら、土壇から小砂利敷へ、苔地へ、芝地へと、漸次最も自然的なるべき純庭園の手法へと、移り變らせゆく様は洵に讃嘆すべき周到な用意である（藤島 1945 p.124）

また、桂離宮の庭園の建築的な取り扱いは御殿から庭園への移り変わりだけではなく、松琴亭前の庭園にもみられるとしている。

このような建築的取扱いが、なるべく自然的であるべき數寄屋の近くにも行はれてゐるのは驚くべきことである。といふのは松琴亭前の取扱いである
（藤島 1945 p.125）

藤島は、具体的には松琴亭前面の爐や水屋の秀抜で新しく豊富な意匠と深々とかかる土庇、そのまわりの鋭い角ばった飛石が小砂利敷の間に打たれているところの四角張った布石によるきちんとした仕切り、さらにそれが斜めに長く突き出して池畔まで伸びているところ、および御腰掛前などの眞の敷石状に一文字に通した敷石などを挙げている。さらに、藤島は輿寄前庭にも同じく建築的な取扱いがみられるとしている。

御殿御輿寄前庭の眞の飛石の嚴正な貴人に接するやうな方正振りは當然過ぎる程當然でなければならぬ。加へて、御輿寄横手の角柱形の手水鉢の高貴さもよくこの前庭の建築的な纏まりに合したとせられる（藤島 1945 p.125）

藤島は、「このやうな建築的な直線構成はその他にも宮苑内のあちこちに見られる」（藤島

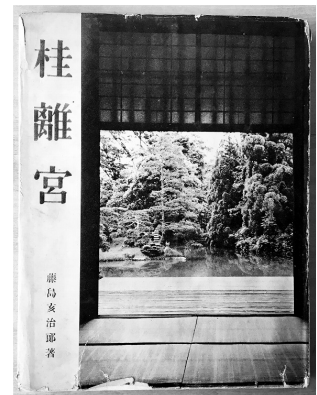


図7 藤島亥治郎『桂離宮』
番町書房
1945（昭和20）年（筆者撮影）

1945 p.125)として、松琴亭前の流れの手水鉢に見る水汀の数段の直線的な石の敷き方、船着場などの具体例を挙げている。さらに、桂離宮は源氏物語の世界を再現するという構想のもとに建築と庭園がつくられているとされてきたが、藤島は単に源氏物語の時代のままではなく、桂離宮がつくられた時代の新しい造形感覚や自然観、さらには生活形態の影響が反映されることにより、新しく独創的な建築と庭園がつくり出されたとしている。

海邊に建てられた山荘の趣を巧みに捉へ、源氏の時代のままではなしに、親王の御時代の造形感覚と自然観と、そして生活形態とから出た新しい家作りと新しい庭作りとをなし得たところに、桂離宮の獨創性が尊く拜せられるのである
(藤島 1945 p.129)

藤島は、こうして桂離宮は「實用目的を完全に達成し得たと同時に至高の美域にも達し得た」(藤島 1945 p.133)としている。また、藤島は桂離宮の建築と庭園の軸の配置が東西南北の方位に合わせたものではなく、自由に配されているという点に着目している。

宮域が京都市井の方形敷地でなく、桂川に沿ふ南北に長い不正三角状をなしているのが、先づは庭を主とした御別業としては此の上ない形であつた。その不正形の園内には何一つとしてしかめつらしく東西南北に軸を合わせたやうなものはない。總ては良しと見た場所に、よしと見た方角を取って自由に配せられてある
(藤島 1945 p.133)

藤島は、桂離宮の各部分はそれぞれの場所において「良しと見た場所に、よしと見た方角」に自由に配置しており、「池を主題とするこの御別業は、池を中心にして東西に相反した副主題を置いて、交互に絶妙な樂を奏せしめる。池西の陽と池東の陰とである。總てはこの對比に於いて園内は無限の變化をなすのである」(藤島 1945 p.134)としている。その上で、「桂離宮に於いてもその主軸は幾つかあり、しかもそれは周到な注意の下に置かれている」(藤島 1945 p.135)として、古書院月見台からの眺めの軸と、月波樓と松琴亭を結ぶ軸を取り上げている。

第一はいふまでもなく古書院月見臺からの眺めで、これが庭園の正式な表であるべきである。ここでは苑内のすべてのものが一齊に樂を奏して錯綜する。[…中略…] その主軸は螢谷へと池の奥行きを深さを示すかの如く、やや左に外れて中島を前後して見せるやうに配した。月は秋ならば丁度この島の彼方より上り、螢谷までの廣い池面は銀色に燦めくのである (藤島 1945 p.135)

第二の軸は月波樓と松琴亭とを結んで引かれる。これは月波樓から松琴亭への眺めと、松琴亭から月波樓への眺めとの両者に役立つものである。[…中略…] 陰陽

それぞれにその本質の極端を發揮し、そして、この軸線に沿ひ、兩者前後してその對比によつて眺望の目覺しさの最高潮を奏せしめた庭園効果は心憎いばかりとせられねばならない。陰と陽、動と静、明と暗。この對比があつて始めて庭は生きる（藤島 1945 pp.135-137）

藤島は、桂離宮の苑内全体を見渡せる古書院月見台からの眺め、特に秋の月の眺めの軸をこの庭園の正式な表であるとしている。そして、それぞれから見る庭園の景觀が対照的な月波樓と松琴亭とを結ぶ軸を第二の軸としている。これらの軸はともに東西方向の軸であり、先に挙げた池を中心にして東西に置いている陰と陽の相反した副主題を結ぶ方向となっている。これに対して、藤島はもう一つの軸として月波樓北側の岬からの眺めの軸があるとしているが、陰陽兩者を左右に並べた形となるこの軸はさほど成功していないとしている^{注19)}。

このように、藤島は桂離宮の建築と庭園について「かくしてこの御別業は家と庭との渾然融和した此の上ない纏り方で四季折り折りの趣を味はひ得るのである」（藤島 1945 p.146）とし、桂離宮の造形について以下のようにまとめている。

御離宮を一貫した造形の妙とは何かといふことである。それはかういへようか。
周到な注意を以てせられた地割、陰陽調和の妙、木構成のなす日本的造形美の無比の發現、居住と茶趣味との對立と融合、しかも全局を支配する高雅と明朗と
(藤島 1945 p.147)

藤島の桂離宮意匠論では、桂離宮の庭園各部に建築的な取り扱いが見られるとしている点や、古書院月見台からの眺めの軸、および月波樓と松琴亭とを結ぶ軸の考え方に建築と庭園を結びつける視点がみられる。

なお、森蘊は学生の時に田村剛を通して藤島に許可をもらい、1931（昭和6）年4月から東京帝国大学工学部建築学科で行われていた藤島の日本と西洋の建築史などを聴講した。また、卒業後には藤島邸の庭木を森が選び、運び、植える手伝いをしている^{注20)}。また、後年には毛越寺庭園の調査に協力するなど藤島と森の間には交流があった。そして、森は藤島の『桂離宮』を通じ啓発されるところがあったとしている^{注21)}。

ところで、桂離宮の建築と庭園のうちその南半分、特に笑意軒の建築とその周辺の庭園について、藤島は評価しないとしている。たとえば、「その附近一体の御庭は最早他の部分のやうに我々に異常な感激を與へてくれない」（藤島 1945 p.116）、「些か構想に於いて劣る部分」（藤島 1945 p.133）、「庭の南部には指摘すべき庭の美しさが無い」（藤島 1945 p.138）、「笑意軒の意匠は私はそれほど高く買はない。ここには既に江戸時代の厭味がある。伸び切れずにいぢけた、その癖一段と凝つてみせようとする茶趣味の悪い表現がある」（藤島 1945 p.145）などの記述が見られる。

なお、藤島は『桂離宮』のなかで、文献に関すること、古書院と中書院の建設時期、「御別業之事」に記載されている人々について、瓜畑の茶屋についてなどに関しては森蘊の研究を引用して解説をしている箇所がある。このことから、藤島が1945（昭和20）年頃までの森蘊の研究を評価していたことがわかる。

3-5. 森蘊の桂離宮意匠論（1）

学生時代から桂離宮を度々訪問していた森蘊が、本格的に桂離宮の研究をはじめたのは東京工業大学教授の前田松韻の助言により1941（昭和16）年に日本学術振興会より研究費の補助を受けてからのことである。その後、森は学会誌などに桂離宮に関する研究を精力的に発表していく。さらに、終戦後の1950（昭和25）年には東京工業大学教授で建築家の谷口吉郎の研究協力者として文部省の科学研究費を受けてさらに桂離宮の研究を進めていった。

森がそれまでの研究をまとめたのが1951（昭和26）年に出版された『桂離宮』（以下、創元社版『桂離宮』と呼ぶ）である。そのなかで森は、桂離宮の機能と目的について「建築については建築計画の重要なポイントである配置（位置と方位角）と構造であり、庭園についてはその利用即ち建築及庭園を含めて桂離宮に於ける親王家の生活に密接に関係している」（森 1951 p.15）としている。さらに、森は桂離宮の中で「最東端に近い古書院の広縁と、その玄関に当る輿寄の東北側にある月波楼、広い池水を差挟んでその東対岸に松琴亭があり、この附近が離宮中最もすぐれた建築と庭園との関連的構成を示してゐる」（森 1951 p.35）とした上で、「桂離宮の近代性」（森 1951 p.19）に言及している。具体的には森は以下のように記している。

桂離宮で特に目立つのは、書院建築の明るくひろびろとして、使い勝手のよいこと、松琴亭などの茶室の派手な取扱など、それらはこれまでの書院とか数寄屋とか呼ばれるものに見ない技巧である。又建築の内部だけではなくその環境の、庭園とは呼ばれない様な単なる空間に見られる斬新奇抜な処理法である。そこに見られる創造精神は、[…中略…] 自由な近代藝術精神を地で行っている

（森 1951 pp.19-20）

桂離宮の創始者は、日本古来の造庭技法を抛つ一方、極度に自然との隔離をはかるように種々の新しい試みを行なっているのである。それ以前には庭園材料としては考えられていなかった石造物や方形の刈込を大胆に取入れ、積極的な造形を試みたのであった。然もこれ等の加工材料の取扱は、それまでの路地のように、

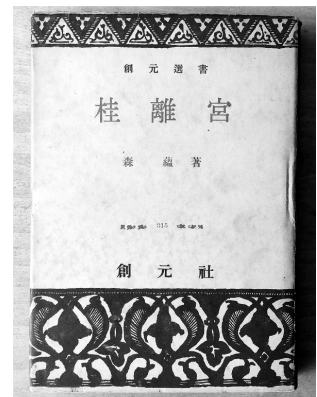


図8 森蘊『桂離宮』
創元社
1951（昭和26）年（筆者撮影）

すべて単なる茶湯の儀式に基いて、実用と美観の両立をはかるに汲々としただけのものではない。もつと純粹に藝術性の高い性格をもっているのである。

(森 1951 p.22)

森は、桂離宮にそれまでの日本の建築や庭園にみられない明るさや、それまでの造園技法にはない新しい試みを行なっている点を「桂離宮の近代性」とし、「こうした箇所はもはや天然の景色を写した縮景の庭園ではなく、一種の建築であると見るもよく、新しい言葉でいえば戸外室と評してもよい」(森 1951 p.22)としており、桂離宮の庭園に建築的な部分があるとしている。ここで、「戸外室」とは大正時代に生活改善のための住宅改良および庭園改造を求める動きのなかで、それまでの日本の伝統的な庭園ではなく、また西洋の庭園の模倣でもなく、住宅の内部の室と同様に、家族の生活のための実用的な屋外の室としての庭園として提言されたものである。なお、実用主義の庭園とは東京帝国大学教授の田村剛が1919(大正8)年に出版した『実用主義の庭園』において提唱したものであり、森は東京帝国大学入学後まもなく受講した田村剛の造園学に強くひかれたことをきっかけとして日本庭園研究に興味を持ち、その後も田村の影響を受けている。では、具体的に森は桂離宮の庭園のどのようなところを近代的で建築的・実用的と考えているのか。

桂離宮は建築内部は勿論のこと、庭園より建築への到達、建築より庭園への推移、建築相互間の連絡など建築及其の接触部分に於ける近代的な解決法を示唆する一方、手のかかる石組みや高価な名木を省略して、そぞろ歩きの野辺や農家の庭などにふと見出される、すなおな草地や木立を現代庭園に取り入れるべき事を教えて呉れる(森 1951 p.23)

ここで森は、桂離宮の中でも庭園から建築へのアプローチ、建築より庭園への移り変わり、書院や茶亭などの建築相互間の連絡などの建築とその接触部分に近代的な手法が用いられているとしている。森はこれらを「庭園における建築的意匠」とし、「興寄への到達、書院建築周辺、或は又一般には最も自然風景的であるべき、茶亭付近に於ける取扱にも、著しく建築的な意匠の行われている事が、桂離宮の大きな特色として取上げられる」(森 1951 p.194)としている。

そのなかで、森は特に「御成門から中門、中門から興寄など主として建築への到達箇所は廻遊式苑路とは関係なく、著しく建築的な取扱方が行われている」(森 1951 p.183)とし、御成門から中門の間の御幸道については、それまでの日本庭園にはあまり使われなかった常緑広葉樹の刈り込みを大々的に用いることにより御幸道の空間を囲い込んでいること、およびそれが長く一直線に伸びる見透線をつくり出していることを取り上げて庭園の建築的意匠であるとしている。

御幸門から中門に至る間の約八分目程の所には水面をわたる中高の土橋が設けら

れてあるけれども、この舗装道路の両側は著しく建築的に仕立てられた常緑広葉樹の刈込によつてかこまれ、それは一直線の見透線を形造つている

(森 1951 p.60)

地形から言えば、この部分は岬になつているが、その中途まで細石で舗装されており、その両側が高さ約六尺位の端正に刈込まれた檜を主とした常緑広葉樹の生垣に限られているのが目立つて居り、その突端には一本の小松が植えられてある。この小松は明かにこの建築的に取扱われた一帯の景観の焦点であり、この小松がある爲に、注意はそこに吸収されてしまい、その背後に輝いている苑池の大景観を完成に遮断する衝立の役目を果たしているのである (森 1951 p.61)

また、御幸道から中門を抜けて入ったところにある輿寄前庭についても建築的意匠となつて
いるとしている。

輿寄前庭は僅か六十坪に足らぬ空間ではあるが、濃緑の苔を区切るやや紫がかつた灰褐色の敷石、飛石、輿寄と主庭との間を隔てる黄褐色の瓦塀、それらの形態と色彩とは無類の調和を見せているのである。[…中略…] 建築への到達地点については、建築的な手法が用いられて居り、これが著しい尊嚴の象徴となつているのである (森 1951 p.196)

さらに森は、書院周辺の取り扱いと広庭について、小砂利を詰めた雨落としとその外側の苔生地、苔生地のなかの一直線の飛石、芝生の広庭との境の瓦を用いた仕切りなどが建築的意匠となつて
いるとしている。

この様な建築的な取扱方は、それまでの書院遺構に附設された庭園では発見し得ない所であるし、この建築的な取扱は先にもものべたように、著しい実用性に立脚するものである事を、桂離宮庭園の特色として認めることが出来るであろう

(森 1951 p.200)

そして、森は松琴亭や笑意軒の茶亭周辺についても建築的意匠が取り入れられているとしている。森は、「桂離宮の茶亭の他の特色としては土庇が多く用いられて居り、それが腰掛茶屋的であることと、その軒先には何れも水屋の設備が露出して配置されていることである」(森 1951 p.129) とした上で以下のように指摘している。

最も自然のままの形態を尊重すべき性質の茶亭、松琴亭や笑意軒などの周辺に於ても同様、建築的な取扱を見出すことができる。殊に旧來の日本庭園的に優れた

技術を、その石組や石橋などに駆使し、この水面に天橋立の象徴というような平安朝傳來の意匠を施こした松琴亭附近に於て、この事あるのは著しいことといわねばならない（森 1951 p.200）

軒下に詰石ある飛石を打っている事は、当然屋外であるべき路地が屋内に持込まれた屋内庭園の趣向であり、茶室としては当然室内にしつらえられる筈の水屋や竈が、軒先に持出されている事と共に、それは明かに極めて近代的な、戸外室の意味に通ずるのであつて、従來の日本庭園の観念には見られなかつた、建築的な取扱方を示しているのである（森 1951 p.201）

このように、森は庭園における建築的意匠を取り上げることで桂離宮の庭園の近代的で建築的・実用的な点を明らかにしている。そこには建築と庭園の結びつきの視点がみられ、これらの視点は藤島亥治郎の『桂離宮』からの影響であると考えられる。

また、森は桂離宮における「建築と庭園の関連的合理性」について指摘している。

庭園は建築の求めに應じ、一方には建築の或部分は庭園との関連に於て、更に合理性を高めている〔…中略…〕桂離宮の目的である避暑、観月、演技などのすべての目的に向つて、建築と庭園の両面が完全な提携を示しているが爲に、桂離宮は機能を十二分に發揮する機会が付與されていた（森 1951 p.175）

森は桂離宮における「建築と庭園の関連的合理性」の具体例として、観月の目的と演技の目的を挙げている。これらのうち、観月の目的としては古書院および月波楼の配置および構造とそれらの前面の庭園の取り扱い方に着目している。森はまず、古書院および月波楼の方位角が完全に観月の目的に合致していること、古書院および月波楼が観月を目的とした建築配置と構造とを持っていることを計算上確認した上で以下のように記している。

ここでは先ず月の出を、一瞬でも早く捕えようとする目的に支障を與えないように、対岸の地形は標高が最も低い部分に当つている。勿論實際逆に言つて月の出の方向を、最も低い地形にあてるような建築の位置を選び、配置構造を決定したというのが事実であろう（森 1951 p.176）

森はまず古書院および月波楼の配置および構造について、庭園の地形との関係から月の出をできるだけ早く捉えるための配慮がなされているとしている。また、森は古書院および月波楼の前面の池を中心とした庭園の取り扱い方にも注目している。

次第に時刻が移り、中天する月の運行に應じて、波心に映ずる月影の鑑賞をさま

たげないように、正面の水面をなるべく奥ふかくとり、次第に南側に赴くに從つて、池の表面を狭めて行き、且対岸の地形はもはや低くして置く必要がないので、そこには池辺の景観を整える目的から、築山を作ることを許容しているのである
(森 1951 p.176)

ここでは、古書院および月波楼から眺める時の月の出から中天するまでの月と、池に映る月影の動きに合わせて池や築山の形状が決められているとしている。さらに森は「池中には不必要な中島を築いたり、橋を架けたり、池際に丈高い樹木を植えたり、池中池際に数多くの石を立てたりする事もさしひかえて、極めて簡素な行き方を採用している」(森 1951 p.176)ということが建築と庭園の関連的合理性の考え方から出てきているとしている。

また、建築と庭園の関連的合理性の別の事例として、森は演技の目的として中書院および新御殿と広庭の関係を挙げている。ここの広庭は鞠場・弓場・馬場としての演技場であり、「この空地の中にはどうしても固定的な建築をすることは避けなければならない。[…中略…] 競技にも差し支えるし、景観上うるさくもあるので、直接に広庭に降りる事の出来るような昇降口を設けなかった」(森 1951 p.177)という空間であるとしている。

建築としては、最も重く見られている筈の中書院や新御殿さえもが、一見無表情なこの広庭の機能発揮のために、位置的に種々譲歩もし、構造的にも特殊な条件を容れて、異例とも見るべきその構造と意匠とを考案したのである
(森 1951 p.177)

ここで森は、庭園の目的を充分に取り入れるために中書院や新御殿の建築の配置や構造を考慮することが建築と庭園の関連的合理性の考え方から出てきているとしている。森は、これらの建築と庭園の関連的合理性のなかに建築と庭園の有機的な結合と調和、つまり建築と庭園の結びつきをみるのである。

そこには桂離宮の性格があり、形姿の上だけでなく、このような面で建築と庭園との密接なつながりが認められる所、本当の意味の建築と庭園の有機的な結合と調和という用語に、ぴったりと当はまるようである (森 1951 p.178)

森の創元社版『桂離宮』における桂離宮意匠論では、それまでの日本の建築や庭園にみられない明るさや、それまでの造園技法にはない新しい試みを行なっている点を桂離宮の近代性とし、桂離宮の庭園には戸外室とも言える建築的な部分があるとして、「庭園における建築的意匠」と「建築と庭園の関連的合理性」という視点から考察を行なっている。そこには常に建築と庭園の結びつきの視点があることがわかった。

ところで、森は笑意軒の建築とその周辺の庭園について、以下のように評価している。

笑意軒は松琴亭意匠の一つの模倣、或は変形とも見るべきもので、そこには斬新な創意というものは見出されない。しかし亭の前面に軒に平行して長く延段を設け、深い土庇の内部には土床面に沓脱及飛石を配置している。又前面の池汀はすべて石積及編柵としていて、人工的のプールの感じが深く、又船着に至る間はすべて左右対称的に取扱われた建築的手法に終始している（森 1951 pp.201-202）

桂離宮の庭園はこのように、外腰掛から松琴亭附近、即ち主建築である書院の対岸に於ては、庭園は池水面を中心として、所謂旧來の日本庭園の技術が縦横にふるわれているのに対し、興寄をはじめ、中書院、新御殿附近から笑意軒にかけての取扱には、これまで行われて居た庭園の取扱とは全く違う建築的な取扱法が採用されているのである（森 1951 p.202）

ここで森は、笑意軒の建築およびその周辺の庭園を松琴亭の模倣あるいは変形とみなしながらも、そこには建築的手法が用いられており、松琴亭の建築やその周辺の日本庭園的技術による庭園との対比に注目している。

なお、森は創元社版『桂離宮』のなかで、湘南亭と桂離宮の近似点、桂離宮庭園の建築的意匠などに関しては藤島亥治郎の研究を引用して解説をしている箇所がある。このことから、森が藤島の研究を評価していたことがわかる。

3-6. 堀口捨己の桂離宮意匠論

1952（昭和27）年に出版された堀口捨己の『桂離宮』は、「先には横井時冬氏、小澤圭次郎氏、川上邦基氏、近くは外山英策氏、澤島英太郎氏、森蘊氏、藤島亥治郎博士など」（堀口 1952 はしがき）によるそれまでの多くの研究に負うところは少なくないとしつつも、「然し思ひつき到つた所は、全く離れた所にあつた」（堀口 1952 はしがき）としている。

いまの桂離宮の建物や庭については、その美しさを如何に見る可きかと云ふ事に於て、既に私は幾とせかの心を養つてゐる。それを示すものは、ここでは、カメラを通して語つてゐる所のもの以外ならない（堀口 1952 はしがき）

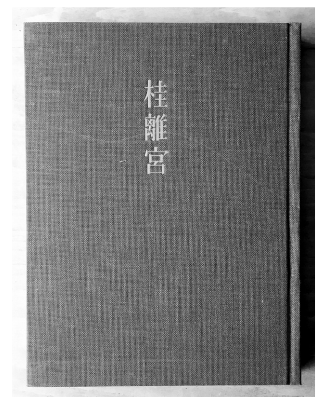


図9 堀口捨己『桂離宮』
毎日新聞社
1952（昭和27）年（筆者撮影）

堀口は「建物や庭を自ら作つて見て、それを寫眞にした場合、如何にその作品としての價值が、いつはる事もなく示されるかを、私は日頃身にしみて知つてゐる」(堀口 1952 はしがき)とし、建築家として写真を通して桂離宮の建築と庭園の良さや美しさを表現しようと試みている。具体的には堀口は奥寄前の壺庭の敷石(眞の飛石)について以下のように記している。

昔から名が高かつた如く、この屋敷の中でも特に鮮かな技を示してゐる所と云へるであらう。然もこの作り方は、庭と云ふより建築と云ふにふさはしい仕方で、使ふ事を主に考へて仕上げる数寄屋造庭の古典とも云へるであらう

(堀口 1952 p.30)

ここで堀口は、奥寄の前庭について建築的手法を用いて実用的につくられており、数寄屋造庭園の古典として高く評価している。また、桂離宮の建築と庭園には古書院の月見台が欠くことのできないものであるとしている。

この縁の先に出た竹縁は月見臺と呼ばれて、桂の里を月の桂に準へた昔から、この月見臺は特にこの建物と庭には、歛く事の出来ないものであつたであらう。少くとも池を見所とした庭の作りは、この月見臺からの眺めを主に考へてゐるやうである(堀口 1952 pp.34-35)

さらに堀口は、桂離宮のなかでも奥寄前庭とともに建築的手法を用いて実用的につくられているところとして、楽器の間西側の濡縁と中書院西側の縁側の床下から庭園への推移の部分を挙げている。

縁側下の吹き放しと軒下に作られた扣き土、それに續いて小石を縁石にして栗石(砂利)を入れた雨落、その外に杉苔があつて飛石がその間を點々として續き、その苔の外側に瓦作りの縁石を使つた芝生の平庭、これらが作る點、線、面の大きさ小さ、長さ短かさ、廣さ狭さ、そしてそれぞれの持ち前が示す粗さこまやかさ、固さ柔かさ、その上に各々の色合、死んだものと生きたもの、これらが入り混り綴りなし、描き出す姿は、建築そのもの、庭園そのものであるが、凡そ建築、庭園が持ち得る繪畫的な面が、凝つて結晶した如き純粹な姿のものである

(堀口 1952 p.35)

これは御奥寄前に見た壺庭の仕上げと共に、桂離宮が示す最も高い然も古くなる事を知らない表現の場である(堀口 1952 p.35)

さらに堀口は、松琴亭の土庇から周辺の庭園にかけての部分についても言及している。

土塗の竈と三角になつた二重の隅棚、それに竹と葎と黒もじの木で組み立てられた袖垣は、土庇の見所をなして、前に開けた夜の面や、池中の天の橋立、いけ向ふの高砂の濱など庭作りの手のこんだ見所と互に響きあひ、映り合つて對ひ立つのである（堀口 1952 p.64）

このように、堀口は、建築家として写真を通して桂離宮の建築や庭園の良さや美しさを表現しようと試み、特に輿寄の前庭や楽器の間西側の濡縁と中書院西側の縁側の床下から庭園への推移、松琴亭の土庇から周辺の庭園にかけての部分などが建築的手法を用いて実用的につくられているところに着目し、そこに建築と庭園の結びつきの視点からみた桂離宮の建築と庭園の美を見出している。これらの視点には藤島亥治郎や森蘊からの影響をみることができる。

ところで、堀口は笑意軒の建築とその周辺の庭園について、以下のように評価している。

笑意軒は庭の南の端にある茶屋で、書院座敷を中にして、松琴亭と對ひ立つ。これは松琴亭より廣く茶屋の中でも最も大きいものである。これは松琴亭が作り庭の最も手の混んだ見所の中に圍まれてゐるのに比べて、何も目を引くものがないような、さりげなさの中に、建つてゐる。然しその庭作りは建築的な構へであると云ふことであつて、見せ場がないと云うことではない。このやうな庭の構へは、御幸御殿前の蹴鞠の場や、弓の場、馬場など、使ふ事を主とした庭作りの續きとして、それと調べを合はせて作られたものである。またそれらと共に、屋敷構の纏められた總てを作り上る一つとして、手のこんだ一目で目を引く場と對ひ立つこのやうな場が、この位の廣がりを持つて、こんな向きの所に、占めてゐなければならぬ事を示してゐるのである。この含みで、松琴亭と共に、心を凝らして營まれたものの如くであり、その表はし得た境も、その美しさに於て、その宜さに於て松琴亭と全く姿を異にしなから、それと競ふに足るだけの確さの中に納まつてゐる（堀口 1952 p.73）

この延段は、船着の岸の石積と相俟つて、この建物を庭の中のものとして、そして庭をまた建築に即いたものとして生かしてゐる（堀口 1952 p.74）

ここで堀口は、笑意軒の建築およびその周辺の庭園は見せ場がないということではなく、そこには建築的手法が用いられているとして注目している。堀口は笑意軒の建築およびその周辺の庭園を、新御殿前の蹴鞠の場や弓の場、馬場などの実用的な庭園との連続性や、松琴亭の建築およびその周辺の庭園の最も手の混んだ見所との対比からみて、松琴亭同様に美しく良いものであると高く評価している。この点について堀口は藤島や森と意見が異なっている。

なお、堀口は『桂離宮』のなかで、新御殿の前の芝庭、中沼左京について、智仁親王の馬を好まれたこと、八條宮妃常照院の手紙、賞花亭と今出川本邸のことなどに関しては森の研究を引用して解説をしている箇所がある。このことから、堀口が森の研究を評価していたことがわかる。

3-7. 森蘊の桂離宮意匠論(2)

1955(昭和30)年に東都文化出版から出版された森蘊の『桂離宮』(以下、東都文化版『桂離宮』と呼ぶ)は、森が1953(昭和28)年に東京工業大学に提出した学位請求論『桂離宮の研究』をもとにして、一部構成を変更し加筆したものである。そのために、1951(昭和26)年に出版された創元社版『桂離宮』に対して、古文書などの史料を示してより詳しい考察を行なったものになっている。このことについては、創元社版『桂離宮』の「緒」に紙数や当時の出版事情により「この度の出版が、私の桂離宮研究の序説的なものに終る事は止むを得ないことである。他日本論の方の刊行をも果すことを期待している」(森 1951 p.3)とあり、東都文化出版の『桂離宮』がその本論であると考えられる。ここでは、「本稿に於いてはこのように桂離宮の歴史乃至は作家論などの多年論争の焦点であつた面にも努力を傾けたのであるが、それにも増して事新しく取りあげたのは、桂離宮の藝術的性格を把握することであつた」(森 1955a p.VII)とし、建築・庭園配置の詳細な実測や、工事の際の現場変更の有無、樹種や岩石地質などの使われている材種古材の鑑定、運搬された土量の算出、月の出の方位角の測定などを通して、桂離宮の完成段階を復原することにより芸術的性格を明らかにしようとしている。そして、その時の視点のひとつが建築と庭園の結びつきである。

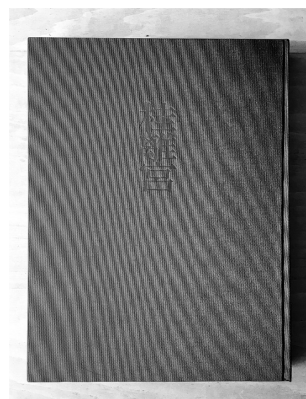


図10 森蘊『桂離宮』
東都文化出版
1955(昭和30)年(筆者撮影)

古書院の廣縁と、その玄関である輿寄の東北側にある月波楼、廣い池水を差挟んでその東對岸に松琴亭があり、この附近が離宮中最も優れた建築と庭園の連携を示している所である(森 1955a p.29)

更に興味あるのは、松琴亭の土庇から池邊に移行する周圍の路地の取扱い方であろう。従来は最も自然風に取扱われていた茶室周圍の路地が、土庇の附近の砌に沿って著しく建築的であるが、土庇の中の飛石は庭園の景觀と關連あるものであるその空間的調和はまことに絶妙である(森 1955a p.29)

外腰掛から松琴亭に至る飛石づたいの苑路の縫う池汀の海洋的景觀と、更に賞花

亭に達する山岳的風景など、これ等箇所に見る日本庭園の古典美と極端なコントラストを示しているのは、これにつづく書院、新御殿及笑意軒に達する一帯である。就中笑意軒の前面に見られる切石によつて畳まれた船つきをもつ方形のプールであり、中書院東南面から新御殿前面にひろがる平坦な芝生と、無造作な落葉潤葉樹の群植に見る簡素な取扱い方である（森 1955a p.29）

ここでは、建築と庭園の結びつきの視点が創元社版『桂離宮』に比べてより整理されていることがわかる。また、創元社版『桂離宮』において「建築と庭園の関連的合理性」とされていた箇所については、東都文化版『桂離宮』では「建築と庭園の実用性」と改められ、離宮での日常生活の場としての建築と庭園の結びつきについて考察している。

少しも無駄のない日常生活の場所として構造し、然も最も優雅な意匠とするために、当時としては最も新しく且つ最も洗練をつんだ技術に乗せて、建築的にも庭園的にも巧妙にまとめ上げられている點で斷然優れていると考える

（森 1955a p.97）

創元社版『桂離宮』においては、「建築と庭園の関連的合理性」として「観月の目的」「演技の目的」が挙げられていたが、東都文化版『桂離宮』では「建築と庭園の実用性」として「銷夏の目的」「茶道の目的」「観月の目的」「芸能及びスポーツの目的」「後水尾上皇御幸奉迎の目的」とより幅広く言及されている。

さらに、「庭園における建築的意匠」についても、創元社版『桂離宮』において自然風景的な取扱いと対照的に建築的意匠が行われていると説明していたのが、東都文化版『桂離宮』では風景的意匠と建築的意匠が渾然一体となって統一されていると表現されている。

桂離宮庭園の中には風景的意匠と建築的意匠とが渾然一體となり、然もこの両者はよく統一され、調和して居る事は驚くべきことである。[…中略…] 桂離宮に於てドイツの近代建築家ブルーノ・タウト氏をして三嘆これ久しうせしめたものは、むしろ庭園とは呼ばれないような建築物に接近した部分と、それを取りかこむあらゆる空間の近代的處理にあると思われる（森 1955a pp.161-162）

森は桂離宮のこうした建築に隣接した庭園の部分、すなわち建築と庭園を結びつける部分の近代的處理が高い合理性にかなったものであると同時に、近代芸術としての新しい造形精神の発露をそこに見出している。

それは高い合理性にかなったものであり、これまで美と實用の完全な兩立にあると論じられたものであるが、私をして言わしむれば、更に高い近代藝術性即ち新

しい造形精神の發露を見出す點にあるといたい（森 1955a p.162）

東都文化版『桂離宮』では、森は建築と庭園を結びつける部分として大きく分けて二つの場合があるとしている。

- ①建築物を目的としてその建築物への接近又は到達する過程にあたる箇所
- ②建築物より庭園の自然景観へと移行していく箇所、つまり建築物と庭園の接触部分

①としては、表門から中門、更に輿寄前庭、および紅葉山裏の待合腰掛附近から松琴亭に至る間において見られるとし、その目的物に一層の風格と威厳を与えるために極力奥行き深い感じを現そうと努めている点を指摘している。具体的には、到達しようとする目的物や通路の終点が最初からあらわに見えないように、殊更に生垣や塀でさえぎりつつ、直接見えなくても通路の存在や通路の指示する方向によって目的物の位置及び形状を心の中に想像させる箇所である。森は、そこでは、景観を整えるために進路の正面に中間目標を置き、それに向かって誘導している点も指摘している。

②としては、書院建築の前庭、殊に中書院の縁下の砌から芝生のある広庭に移行する箇所や、最も自然であるべき数寄屋の松琴亭周囲の取扱い方において見られるとしている。さらに、直線的な石の敷き方などの建築的手法は、待合外腰掛の南前面に一文字に敷き詰められた延段や、笑意軒の北側前面の延段などにも見いだすことができるとしている。

そして、森は桂離宮をそれまで庭園内に使われたことのない加工石造材料および自然らしくない方形の刈込等の利用による庭園であるとし、そこには庭園は自然が見えるように表現されなくてもよいという新しい考え方があり、人が戶外室や建築と呼ぶようなものさえ含まれてよいとしている^{注22)}。さらに、桂離宮の建築との取合せによる色彩の庭園美や、単に視覚だけでなく触覚や運動感覚にまで訴える時間的推移を考慮に入れた試みを取り上げて、その創造精神はよく近代芸術精神と通ずるものがあるとし^{注23)}、桂離宮庭園にみる近代性について言及している。

さらに、東都文化版『桂離宮』では、「欧州文化影響の有無」として桂離宮に対するキリスト教文化の影響の可能性について示唆している点も新しい視点である^{注24)}。

3-8. 森蘊の桂離宮意匠論(3)

1956(昭和31)年に創元社から出版された森蘊の著書『新版 桂離宮』は、1951(昭和26)年に出版された創元社版『桂離宮』を改訂したものである。この間、森は1952(昭和27)年4月から奈良国立文化財研究所の開設に伴って同所の研究員となって京都に移住し、1953(昭和28)年に東京工業大学に学位請求論文『桂離宮の研究』を提出して工学博士の学位を授与され、1955(昭和30)年にはそれをまとめた東都文化版『桂離宮』を出版している。さらに、1954(昭和29)年に建築家ヴァルター・グロピウスが来日した際に森が桂離宮の案内を行い意見交換し、

1955（昭和30）年に建築家ル・コルビュジエが来日した際には坂倉準三を通じて意見を聞いている^{注25}）。森はこの間も継続して桂離宮の研究を行っており、新たな史料の発見や現地での詳細な調査などを通して、1951（昭和26）年の創元社版『桂離宮』の論旨補強のため一部に相当の加筆が必要になったとしている。改訂にあたっては全体の構成が見直され、文章も全面的に書き改められている。

森は改訂にあたって前説をくつがえす程のものはないとしながら、新たに書き加えられた部分として、書院建築・庭園建築・庭園の復原された姿についてのそれぞれの章と、西欧文化の影響の有無についての記述がある。これらは森の学位請求論文『桂離宮の研究』および東都文化版『桂離宮』などにおいて考察されたものを追加したものである。

さらにここで注目したいのは、新たな考察として桂離宮の特色についての「桂離宮の国際的性格」と、庭園における建築的意匠についての「庭園における間仕切の存在」が追加されていることである。ここで、庭園における建築的意匠については、創元社版『桂離宮』や学位請求論文『桂離宮の研究』、東都文化版『桂離宮』でも取り上げられていたが、「庭園における間仕切の存在」に関する考察は『新版 桂離宮』ではじめて出てきたテーマである。

「桂離宮の国際的性格」については、「その庭園においては日本ではこれまでまったく創案されたことのない明るい建築的な意匠、透視的遠近法や、見透線の設置という事実が、一見しても知られるし、現地で実測するならば一層明瞭な数値として表わされるのである」（森 1956 p.95）とし、森は「明るさ」「透視的遠近法」「見透線」の3つを「桂離宮の国際的性格」の特徴として挙げている。

「明るさ」については、「ちょうど桂離宮が完成されたその時期には忘れられかけていたものであつた」（森 1956 p.95）とした上で、桂離宮の書院建築の方位角や雁行型の配置、白色や淡黄橙色・淡桃色の壁、腰板のない明障子、松琴亭の白色と藍（緑味青）色の市松模様、さらには屋外演技場としての書院の広庭、池を中心とした庭園全体など、桂離宮の建築と庭園の全体に明るさが満ちているとしている^{注26}）。

「透視的遠近法」については、「これは消失点を考慮にいった考え方で、簡単な言葉を使えば末すばまりの描寫法である」（森 1956 p.97）とした上で、興寄と前庭、中門をくぐったところの敷石、中書院一の間（御座間）袋棚の下板の傾斜、新御殿一の間（暈縁）などにみられるとしており、これも桂離宮の建築と庭園に共通した性格であるとしている^{注27}）。

「見透線」については、「一直線の通路の両側を建築的の障壁または生垣などでかこい、その先端に指導標的効果をねらつて加工した庭園材料（石燈籠、手水鉢、整形の樹木など）を配置した場合に生ずる」（森 1956 p.98）とした上で、御幸門から中門に至る間の御幸道の各處、

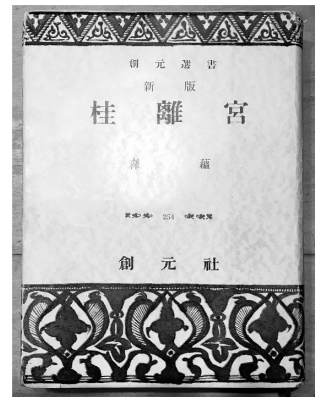


図11 森蘊『新版 桂離宮』
創元社
1956（昭和31）年（筆者撮影）

外腰掛延段、先端に小松のある月波楼北側の蒲鉾型の岬などにその適例が見出されるとし、「このような見透線 (VISTA) の設置は、イタリア・ルネッサンスの庭園などによく用いられている手法である」(森 1956 pp.98-99) としている。また、「この見透線は、庭園だけでなく、室内から庭園への眺望についても同様の考え方が行われている」(森 1956 p.99) として、古書院二の間からその前面に広がる池庭への眺望、玄関内側の鏝間または囲炉裏間から奥寄前庭の織部型燈籠の立つ築山方面を見た場合、中書院二の間南前庭を見透した場合も同様の効果が見られるとし、桂離宮の建築から庭園への眺望に見透線 (VISTA) の手法が用いられているとし^{注28)}、そこに桂離宮の国際的性格がみられるとしている。

森は西欧文化の影響は桂離宮の美の本質にふれる非常に面白い問題であるが、にわかに結論が出せるものではないので今後に残された宿題であるとしている^{注29)}。ただし、ここで森は「明るさ」「透視的遠近法」「見透線」というそれまでには見られなかった桂離宮の建築と庭園の結びつきの視点を提起している。

庭園における建築的意匠についての「庭園における間仕切の存在」については、森は「屋外室」という大正期の生活改善運動における庭園改造の中で出てきた建築と一体となった屋外の室としての庭園の考え方を桂離宮の庭園に当てはめて考察しようとしている。

建築的意匠をたんに建築形態的の取扱に限定してしまうことは、狭量であると考えられるのであつて、建築的精神という語句の解釋に立脚するならば、[…中略…] それは庭園がたんに自然風景の象徴であるという観念を一步進めて、その中に自然風景的添景物をもつ屋外室というものも、また庭園の範疇に在り得ることの實證してみようとするのである (森 1956 pp.287-288)

その上で森は、「グロピウス博士が、『桂離宮の庭園は屋外における建築または自然物により切り取られた空間の面白さ』を讀んでいた」(森 1956 p.297) ことを引用しつつ、全園の最高地点にあつて周囲に樹木が密植されている賞花亭周辺、北前面に広く方池が入り込んでいるのと生垣によって新御殿の前面広庭や梅馬場の方からの見通しがさえぎられている笑意軒周辺、人工によって盛り上げた築山で区切った盆地状の小区域をさらに樹木で隠蔽し蘇鉄山や紅葉山で池水面から完全に遮断された外腰掛周辺などは、「庭園における間仕切の存在」によって各々独立した小天地を形成しているとしている。また、松琴亭にむかって石橋を渡らずに、卍字亭に向かつて進むとすると、飛石のひとつが手前のものより30cm、向こうのものより25cmも高く据えられていて、森はこれを「縁から縁または縁から室への間仕切として、別に引戸や扉のない個別の入口に使用する框同様の性質のものといつて良いであろう […中略…] 一帯の既成の景觀を損うことを恐れ、このような観念的な間仕切を考案したもののようである」(森 1956 p.299) としており、森が庭園における建築的意匠として物理的に空間を分ける間仕切りだけではなく、眺望は生かしながら人の意識の上で空間を分ける観念的な間仕切りについての考察を

行っていたことがわかった。そして、そこには森の建築と庭園の結びつきの視点をみることができる。

3-9. 西澤文隆の桂離宮意匠論

西澤文隆には『桂離宮』と題する著書はないが、1976（昭和51）年に出版された『西澤文隆小論集3 庭園論Ⅱ』の中に「桂離宮」の文章がある。西澤は『庭園論Ⅰ-Ⅲ』について「忙しい建築家たちのためには安直に理解して貰えるような形にして伝達しておきたい。造園家にも一建築家の考えを通してもう一度庭園を見直して欲しい —と大変欲張った考え」（西澤1988a p.421）からつくった本であるとして、庭園論Ⅰにおいて庭園のモチーフを軸に考察を行い、庭園論Ⅱと庭園論Ⅲでは日本庭園の実例を取り上げて説明している。

西澤は庭園論Ⅱの中の「桂離宮」において、桂離宮の古書院の建築と庭園の関係について以下のように記している。

一の間と二の間はともに書院風で障子を開放すれば室と庭が連続し、一体化する。
そしてその向う御池真近く美しい神仙島の姿が眺められるのである
(西澤 1976 p.424)

そして、西澤は「景を区切ってゆく技法が桂離宮ほど徹底しているものはない」（西澤 1976 p.436）として、桂離宮の庭園の各部分が生垣や塀などで囲われている状態を、建築内の室と同様のものとしての「屋外の室」とみなしている。西澤が桂離宮の庭の各部分を「室」とみなしている記述をいくつか挙げる。

この御幸道の空間は完全な廊下の空間であるが細長い室とも見られる一室である
(西澤 1976 p.437)

右手（西）の月波楼から続く刈込みの右手で苑路は直角の軸線を西へ出し、正面に茅葺の中門が現われる。[…中略…] T字形になってはいるがまったく囲われた一室を構成しているとみてよい（西澤 1976 p.440）

古書院、玄関、中門、そして東南を塀と刈込みで囲い込まれていてここはまさに一室である（西澤 1976 p.441）

西澤はその他にも、月波楼の山上、紅葉の馬場、外腰掛待合の庭、鼓瀧下方の石橋周辺、万

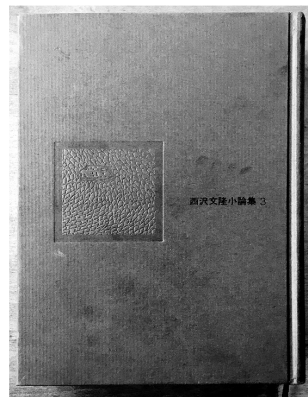


図12 西澤文隆『庭園論Ⅱ』
相模書房
1976（昭和51）年（筆者撮影）

字亭を含む橋から橋まで、水路の北西の橋から石の一本橋まで^{注30)}、賞花亭附近、園林堂の区域、笑意軒の区画などもそれぞれ一室と捉えている。西澤によると桂離宮には13もの戸外の室があることになる。また、西澤は囲われた室とともに、苑池を楽しむ開けた空間をホールと呼んでいる。

途中飛石が混っているけれどもほとんどが延段で構成されているこの空間は囲われた室ではなく、池とその対岸を含めた大ホールなのである。すなわち苑池を楽しむ開けた空間であり、[…中略…] 開けた景を楽しむためには足元に注意を払わなくてすむように延段になっているのである（西澤 1976 p.442）

ここから苑路は山際を御池ぞいに進むことになり松琴亭前の石橋まで開けつくした空間である。建築でいえば中央ホールというところである

（西澤 1976 pp.444-445）

松琴亭から賞花亭の島への土橋までは左が山で遮蔽され、右が池で開放されていて白川橋から土橋まで開けたホールである（西澤 1976 p.447）

ここでは桂離宮内の3つの空間がホールとして位置付けられている。さらに、西澤は室やホールとともに飛び石の高さによる区切り・区画にも言及している。

延段の南端を左へ廻り込むと小さな飛石伝いに待合南の刈込みの南を廻り込むことになる。この飛石段の第一石も高く据えられていてそこが区切りであることを示している（西澤 1976 p.443）

鼓瀧をすぎると鼓瀧の上手に架けられた石橋からの飛石段が下りてくる。この最終段の段差も大きく、この分れ道で区画されていることが示されている

（西澤 1976 p.444）

松琴亭への白川橋の手前で苑路は分れるがその手前に吉利支丹燈籠がある。一方の飛石は東南の万字亭へと向うがこの分れ道は飛石段が格別高く据えられていてここが室の区切りであることを示しているというのは森蘊氏の発見である

（西澤 1976 p.446）

この飛び石の高さによる区切り・区画という考え方は文中にもあるように森蘊が発見したもので、森は刈り込みなどを庭園における建築的意匠として物理的に空間を分ける間仕切りとし、飛び石の高さによる区切り・区画については眺望を生かしながら人の意識の上で空間を分ける

観念的な間仕切りとしている。このことから、西澤が森の桂離宮意匠論を参考にしていたことがわかる。また、西澤は廊下的な空間にも着目している。

万字亭から水路の橋へ下りず北進すると長々と飛石が木の下陰に打たれていて鼓瀧へと連なってゆく。ここはむしろ廊下的（西澤 1976 p.447）

松琴亭の裏手は山になっていて一本橋を渡って左折すると山道にさしかかり松琴亭をはずして賞花亭の島への土橋へ出られるようになっている。この道は完全に廊下であり、周遊式の苑路である（西澤 1976 p.447）

蚩溪は大木と寒竹の群生で窮遠な空間である。視界はまったく遮られて溪谷にまよい込んだ趣をなしている。開かれた御池の景観からここへ入り込むコントラストは巧いが、ここは廻遊してゆくようにはなっていない。しかもここも室というよりデッド・エンドの廊下である（西澤 1976 p.448）

蚩溪の土橋を渡って苑路を伝ってくるとこのあたりから山上高く賞花亭の龍田屋の暖簾が見えてくることになる。ここまでの苑路は回遊式の室というより周遊式の廊下であり線である（西澤 1976 p.448）

ここで西澤は、景を区切ってゆく技法が桂離宮ほど徹底しているものはないとし、桂離宮の庭園の空間を建築的な戸外の室として、ホール・室・区切り・廊下として捉えていた。西澤のこの考え方は森蘊の「庭園における間仕切の存在」という考え方の影響を受けて、桂離宮の敷地全体を生活のための空間として建築的に捉えたものであり、そこに建築と庭園の結びつきの視点がみられる。それは、西澤が住宅を設計する際の「敷地全体に住む」、すなわち敷地全体を生活空間と捉える考え方に通じるものがある。なお、西澤は『庭園論Ⅱ』のあとがきにおいて「建築と庭園の関係については『透ける』（『小論集8』）で触れるつもりであるのでそれとダブらぬようにしたいということもあって割愛した」（西澤 1976 p.533）としているが、西澤の死により『小論集8』は出版されなかった。

ところで、笑意軒の建築については、当時の建築家はあまり評価していないとしながら、西澤は格調高い数寄屋として高く評価している。その上で、笑意軒の建築とともにその周辺から船着き場の庭についても、西澤はそこに造園的な意匠がほとんど取り入れられていないことがむしろ笑意軒との組み合わせによりのびやかなよい姿であると高く評価している。

この石の組み方にはなんらの作意的模様もなく、きわめてつまらなくできているのだが、つまらないからこそ自己主張がなく、笑意軒の長い軒の線を引き立てて

いるのである。この北は少し間を置いて北の池へ急傾斜して落ち込んでおり、岸は切石を畳んだ直線の護岸で船着場になっておりここへは二本の階段が通じているが、ここもなんらの作意も見せない作庭で、ただ東端に三光燈籠が一基据っているだけであり、それが見事な構図となっている。このしごくのびやかな立たずまいはまったくどことって頑張ったところのない笑意軒のファサードとともに完璧といってよい姿をみせているのである（西澤 1976 p.427）

なお、西澤は「桂離宮」のなかで、古書院外側の障子や雨戸、竹林亭の推定位置、御池の石組を見る位置、旧河床についてなどに関しては森蘊の研究を引用して解説をしている箇所がある。このことから、西澤が森の研究を評価していたことがわかる。

4. 桂離宮意匠論における建築と庭園の結びつきの視点

ここまで、それぞれの桂離宮意匠論をみてきたが、ここではそれぞれの桂離宮意匠論の中にみられる建築と庭園の結びつきの視点を取り上げてまとめておくこととする。

岸田日出刀は、1929（昭和4）年に出版された『過去の構成』において日本の伝統的な建築や造形意匠をモダニズムの視点から捉えようと試み、桂離宮の書院建築と庭園の両方についてその造形と構成を高く評価していた。ブルーノ・タウトは、1934（昭和9）年に出版された『ニッポン』などにおいて、桂離宮の建築と庭園を統一体であるとしながら、そのなかには桂離宮の庭園の持つ異なった三形式に分化しつつ、それにもかかわらず庭園全体の渾然とした統一を形成しており、そこにタウトは多面性と無数の関連の美を見出している。さらに、桂離宮の建築と庭園の実用性・有用性は機能主義の立場から見ても現代的である点を高く評価している。柳亮は、1942（昭和17）年に出版された『日本美の創生』において桂離宮を平野に山荘を出現させようとするものであるとし、その特質を動きと変化およびそのための高い技術と注意深い用意にあるとしている。そして、平野に山荘を出現させるためには、見かつ見られるという「主客の関係の美学」が重要であり、桂離宮における「建ちが低く床が高い」という建築（内）から見る美しさと庭園（外）から見られる美しさを同時に把握し同時に解決するという点に建築と庭園の関係への意識をみることができる。しかし、昭和初期に行われた彼らの桂離宮意匠論には建築と庭園の結びつきの視点はこの時点ではまだ具体的には取り上げられていなかった。

藤島亥治郎は、1945（昭和20）年に出版された『桂離宮』において桂離宮の庭園各部に建築的な取り扱いが見られるとしている点や、古書院月見台からの眺めの軸、および月波樓と松琴亭とを結ぶ軸の考え方に建築と庭園の結びつきの視点がみられる。

森蘊は1951（昭和26）年に出版された『桂離宮』において、それまでの日本の建築や庭園にみられない明るさや、それまでの造園技法にはない新しい試みを行なっている点を桂離宮の近代性とし、桂離宮の庭園には戸外室とも言える建築的な部分があるとして「庭園における建築的意匠」という視点から考察を行なっている。さらに森は、観月の目的と演技の目的を挙げて、桂離宮の庭園は建築の求めに応じ、一方建築のある部分は庭園との関連において、さらにお互

いの合理性を高めあっているとし「建築と庭園の関連的合理性」という視点を提示している。そこには常に建築と庭園の結びつきの視点があることがわかった。

堀口捨己は、1952（昭和27）年に出版された『桂離宮』において茶庭と茶室建築の研究から得た建築と庭園が一体となった空間構成としての「合目的の美」という視点をもって、建築家として写真を通して桂離宮の建築や庭園の良さや美しさを表現しようと試み、特に興寄の前庭や楽器の間西側の濡縁と中書院西側の縁側の床下から庭園への推移、松琴亭の土庇から周辺の庭園にかけての部分などが建築的手法を用いて実用的につくられているところに着目し、そこに建築と庭園の結びつきの視点からみた桂離宮の建築と庭園の美を見出している。

森蘊は1955（昭和30）年に出版された『桂離宮』において、桂離宮をそれまで庭園内に使われたことのない加工石造材料および自然らしくない方形の刈込等の利用による庭園であるとし、そこには庭園は自然が見えるように表現されなくてもよいという新しい考え方があり、人が戸外室や建築と呼ぶようなものさえ含まれてよいとしている点を指摘している。さらに、森は1956（昭和31）年に出版された『新版 桂離宮』において、それまでの研究に加えて「庭園における間仕切の存在」に着目している。そして、森は庭園における建築的意匠として物理的に空間を分ける間仕切りだけではなく、眺望は生かしながら人の意識の上で空間を分ける観念的な間仕切りについての考察も行っていた。そこにも建築と庭園の結びつきの視点があることがわかった。

西澤文隆は、1976（昭和51）年に出版された『西沢文隆小論集3 庭園論Ⅱ』において景を区切ってゆく技法が桂離宮ほど徹底しているものはないとして、桂離宮の庭園各部の空間を建築的な戸外の室として、ホール・室・区切り・廊下として捉えていた。西澤のこの考え方は森蘊の「庭園における間仕切の存在」という考え方の影響を受けて、桂離宮の敷地全体を生活のための空間として建築的に捉えたものであり、そこに建築と庭園の結びつきの視点がみられる。

なお、今回取り上げた桂離宮意匠論では、興寄前庭や古書院月見台からの眺め、松琴邸の建築とその周辺の庭園などについてはいずれも高く評価しているが、笑意軒の建築とその周辺の庭園については以下のように評価が分かれている。

タウト：1933（昭和8）年「桂離宮」では造園芸術の片鱗も見当たらないとして評価はあまり高くないが、1936（昭和11）年「永遠なるもの」では笑意軒とその周辺の庭園を日本の建築家が模倣すべきものであると評価している。

藤 鳥：1945（昭和20）年『桂離宮』では指摘すべき美しさが無いとして笑意軒とその周辺の庭園の意匠はそれほど高く買わないとして評価は低い。

森 ：1951（昭和26）年『桂離宮』では松琴亭の模倣としつつも、周辺の庭園に建築的手法があると注目している。

堀 口：1952（昭和27）年『桂離宮』では笑意軒とその周辺の庭園について、新御殿前の広庭との連続性や松琴亭と対比して松琴亭同様に美しく良いと高く評価している。

西 澤：1976（昭和51）年『庭園論Ⅱ』では笑意軒とその周辺の庭園について造園的意匠がな

くのびやかなよい姿であると高く評価している。

ここでは、笑意軒の建築とその周辺の庭園について、建築史家である藤島は評価が低く、建築家であるタウト・堀口・西澤は評価が高い、特に堀口・西澤は非常に高く評価している。そして日本庭園研究者で作庭家でもある森はそれらの中間的な評価であることが興味深い。

5. おわりに

本稿では、桂離宮意匠論の比較を通して日本庭園研究者で作庭家の森蘊を中心に建築家の堀口捨己・西澤文隆らの日本庭園研究が持っていた建築と庭園の結びつきの視点が具体的にどのようなものであったのかを探ってきた。

彼ら以前、建築造形意匠研究者の岸田日出刀、建築家のブルーノ・タウト、美術評論家の柳亮らにより昭和初期に行われた研究は、桂離宮の建築と庭園を一体のものとして捉え評価するものであったが、そこにどのような建築と庭園の結びつきがあるのかという具体的な考察には至っていなかった。ただし、岸田の桂離宮をモダニズムの視点で捉える方法や、タウトの桂離宮の多面性と無数の関連の美や実用性・有用性を現代的であるとする評価、柳の見かつ見られるという主客の関係の美学など、それぞれの考え方はその後の桂離宮意匠論に影響を与えたと考えられる。

その後、第二次世界大戦終戦直前に出版された藤島亥治郎の『桂離宮』は写真を大々的に用いたもので、森はそこから啓発されるところがあったとしている。特に、桂離宮の庭園は極めて建築的であるとする藤島の捉え方には建築と庭園の結びつきの視点がみられ、森や堀口・西澤の桂離宮意匠論に影響を与えている。

戦前から桂離宮の研究を行っていた森は、戦後に著書や学位請求論文として研究の成果をまとめる。森の桂離宮意匠論における建築と庭園の結びつきの視点は大きく分けて「建築と庭園の関連の合理性」「庭園における建築的意匠」として捉えられている。森は「建築と庭園の関連の合理性」について建築と庭園の詳細な実測や方位角等の計算、つくられた当時の復原的研究などを通して考察している。また、「庭園における建築的意匠」には桂離宮の庭園は極めて建築的であるとする藤島の捉え方の影響が見られる。その後、森は「庭園における建築的意匠」の考察から「庭園における間仕切の存在」について言及し、建築と庭園の結びつきの視点をさらに発展させている。

堀口は創作者である建築家として写真を通して桂離宮の庭園各部分が建築的手法を用いて実用的につくられていることを示し、そこに建築と庭園の結びつきの視点からみた桂離宮の建築と庭園の美を見出している。

西澤の桂離宮意匠論は、桂離宮の「庭園における間仕切の存在」という森の考え方をさらに発展させ、桂離宮の敷地全体を生活のための空間として建築的に捉えたものであり、そこに建築と庭園の結びつきの視点がみられた。

これらにより、昭和初期の桂離宮意匠論では建築と庭園の結びつきの視点についての具体的な考察には至っていなかったが、戦時中に桂離宮の庭園を建築的であるとする藤島の桂離宮意

匠論が出てきて、戦後の森や堀口・西澤らの建築と庭園の結びつきの視点による桂離宮意匠論に発展していったことがわかった。

註

- 注1) 森 1973 p.12 このとき森は田村剛の造園学の講義について「そのはじめごろには日本庭園史をやるなどとは思わず、洋行帰りの新知識のにじみ出る西洋庭園のあたりが一番おもしろく感じられた」としている。
- 注2) 森 1981 p.2 当時の庭園について「当時は現今と違って御所、離宮はもちろんのこと、社寺拝観、ことに庭園の鑑賞者など全然なかったといった方がよい時代で、どこへ行ってもゆっくりと拝見できたし、所有者、管理者の方々からその由緒などていねいに説明していただけたのである」としている。
- 注3) 森 1973 p.24 に記述がある。
- 注4) 森 1971 p.13, 1973 p.28, 1983 などに記述がある。
- 注5) 森 1973 p.25 森は昭和16年頃から桂離宮の研究をはじめているが、それには前田松韻が関係している。森は東京工業大学での前田との交流を通して、その後の重要なテーマである桂離宮の建築と庭園の結びつきの復元的研究に取り組むことになる。そして、この研究が後に森が東京工業大学に提出する学位請求論文『桂離宮の研究』につながる。
- 注6) 森 1953 p.6 「昭和25年度に於ては文部省科学研究費の補助を受け、東京工業大学教授谷口吉郎博士の協力者として、博士より種々便宜を興えられた」とある。
- 注7) 森 1981 pp.7-8 森は「日本庭園史学をはじめた人たち」として他に外山英策・吉永義信を挙げている。
- 注8) 西澤 1988b p.87 「緑・人・自然—[対談・村野藤吾]」に記述がある。初出は雑誌『都市住宅』1973年5月号である。この対談のなかで村野は戦争中の仕事がなかった時に『日本庭園発達史』を一生懸命読んでぼろぼろになったと述べている。
- 注9) 西澤 1978 p.76 西澤が大阪で仕事をするようになったのは坂倉準三建築研究所大阪事務所開設による。
- 注10) 金澤 2006 p.39 に記述がある。
- 注11) 西澤 1978a p.77 に記述がある。
- 注12) 森と西澤の実測図については、前々稿 田中 2015 pp.28-32 において考察を行なっている。
- 注13) 堀口の『庭と空間構成の伝統』に対する西澤の書評は『国際建築』1965年9月号に掲載されている。
- 注14) タウト 1946 p.242 タウトは1933(昭和8)年5月3日に来日し、1936(昭和11)年10月まで日本に滞在した。
- 注15) 岸田 1929 自序 に記述がある。
- 注16) タウト 1946 p.249 タウトは『ニッポン』を1933(昭和8)年6月24日から7月12日の間に書いた。
- 注17) タウト 1946 p.250 「日本建築の世界的奇蹟」は1934(昭和9)年10月に書かれ、翌1935(昭和10)年1月発行の欧文雑誌“Nippon”に掲載された。
- 注18) タウト 1946 p.250 「永遠なるもの」は1936(昭和11)年1月に書かれた『日本の家屋とその生活(Das japanische und sein Leben, 1936)』の最後の章である。『日本の家屋とその生活』は1949(昭和24)年に日本語訳が出版された。
- 注19) 藤島 1945 p.137 に記述がある。
- 注20) 森 1957 あとがき 森はそのころ大学院に在籍しながら庭師の内弟子として作庭の現場を経験している。
- 注21) 森 1973 p.30 に記述がある。

- 注22) 森 1955a p.165 森は加工石像材料として畳石・石燈籠・手水鉢を挙げている。
- 注23) 森 1955a pp.165-166 森は平安から室町時代の庭園が主として絵画にあらわれた二次元の景観を三次元の庭園としてあらわしたものであるのに対して、桂離宮は第四次元の時間的推移まで考慮に入れた最初の試みであったのが日本庭園史上最も特色ある点であるとしている。
- 注24) 森 1955a pp.103-104 に記述がある。
- 注25) 森 1956 pp.91-92 グロピウスが来日した時の様子はグロピウス会編集『グロピウスと日本文化』（1956年 彰国社）にまとめられており、森も「グロピウス博士の日本観」という文章を書いている。
- 注26) 森 1956 pp.95-96 森はこの明るさは明瞭に創始者の作意の中に意識されているとしている。
- 注27) 森 1956 pp.97-98 に記述がある。
- 注28) 森 1956 pp.98-99 に記述がある。
- 注29) 森 1956 pp.102-104 森は桂離宮の造営時に八條宮家に西欧文化の刺激が入る可能性はあったとしている。
- 注30) 西澤 1976 pp.446-447 西澤は「厳密には鼓瀧から松琴亭東の石の一本橋までが一室で『ホール』、格別高く据えられた飛石段から東万字亭西北の水路の橋までと、そこから万字亭までと二間続きの一室が池に開くホールにくっついていると見るべきだが万字亭への二室のうち、西側の一室は見えない仕切りで仕切られているだけであるからホールのでもあるのだが細く奥へ入り込んでいるからやはり室といった方が適切であろう」としている。

参考文献

- 稲垣栄三他監修 1996 『堀口捨己の「日本」 空間構成による美の世界』建築文化8月号別冊 彰国社 平成8年
- 岸田日出刀 1929 『過去の構成』構成社書房 昭和4年
- 新建築社 1999 『坂倉建築研究所 アソシエイツのかたち』新建築社編集・発行 新建築1999年9月臨時増刊号
- 西澤文隆 1974 『西澤文隆小論集1 コートハウス論』相模書房 昭和49年
- 西澤文隆 1975 『西澤文隆小論集2 庭園論Ⅰ』相模書房 昭和50年
- 西澤文隆 1976a 『西澤文隆小論集3 庭園論Ⅱ』相模書房 昭和51年
- 西澤文隆 1976b 『西澤文隆小論集4 庭園論Ⅲ』相模書房 昭和51年
- 西澤文隆 1988a 『西澤文隆の仕事(一) 透ける』鹿島出版会 昭和63年
- 西澤文隆 1988b 『西澤文隆の仕事(二) すまう』鹿島出版会 昭和63年
- 西澤文隆 1988c 『西澤文隆の仕事(三) つくる』鹿島出版会 昭和63年
- 西澤文隆「実測図」集刊行委員会 1997 『建築と庭 西澤文隆「実測図」集』建築資料研究社 平成9年
- 西澤文隆実測図集刊行会 2006 『日本の建築と庭 西澤文隆実測図集 解説編』中央公論美術出版 平成18年
- ブルーノ・タウト 1934 『ニッポン』平居均訳 明治書房 昭和9年
- ブルーノ・タウト 1946 『桂離宮』タウト著作集第一巻 篠田英雄訳 育成社 昭和21年
- ブルーノ・タウト 1949 『日本の家屋と生活』吉田鐵郎・篠田英雄訳 雄鶏社 昭和24年
- 藤島亥治郎 1945 『桂離宮』番町書房 昭和20年
- 藤島亥治郎 1950 『桂離宮』推古書院 昭和25年
- 堀口捨己 1952 『桂離宮』毎日新聞社 昭和27年
- 森蘊 1951 『桂離宮』創元社 昭和26年
- 森蘊 1955a 『桂離宮』東都文化出版 昭和30年
- 森蘊 1955b 『修学院離宮』創元社 昭和30年

- 森蘊 1956 『新版 桂離宮』創元社 昭和31年
森蘊 1957 『日本の庭園』創元選書259 創元社 昭和32年
森蘊他 1960 『日本の庭』森蘊著 恒成一訓(写真) 朝日新聞社 昭和35年
森蘊 1973 『庭ひとすじ』学生社 昭和48年
森蘊 1981 『日本庭園史話』NHK ブックスカラー版 日本放送出版協会 昭和56年
森蘊門下生一同 1989 『故森蘊先生著述作品目録(稿)』自家版 平成元年
柳亮 1942 『日本美の創生』育生社弘道閣 昭和17年

参考論文

- 金澤良春 2006 「両界曼陀羅 —「設計と実測」あるいは「坂倉準三と西澤文隆」—」『日本の建築と庭園 西澤文隆実測図集 解説編』西澤文隆実測図集刊行会 中央公論美術出版 平成18年 pp.36-47
田中栄治 2006 「雑誌『建築と社会』にみる戦前の関西の住宅 —阪神間のモダニズム住宅 その2—」『神戸山手大学紀要』第8号 pp.105-118
田中栄治 2007 「雑誌『住宅研究』にみる大正期関西の住宅 —阪神間のモダニズム住宅 その3—」『神戸山手大学紀要』第9号 pp.97-108
田中栄治 2009 「雑誌『新建築』にみる大正から昭和初期の関西の住宅 —阪神間のモダニズム住宅 その4—」『神戸山手大学紀要』第11号 pp.61-72
田中栄治 2012 「大正後期から昭和初期の関西の住宅における庭園の役割 —阪神間のモダニズム住宅 その5—」『神戸山手大学紀要』第14号 pp.33-55 2012.12.20
田中栄治 2013 「大正後期の住宅における庭園の役割 —大屋霊城『庭本位の小住宅』より—」『神戸山手大学紀要』第15号 pp.29-46 2013.12.20
田中栄治 2014 「昭和初期の住宅における建築と庭園 —西川友孝『造庭建築』を中心に—」『神戸山手大学紀要』第16号 pp.19-36 2014.12.20
田中栄治 2015 「住宅における建築と庭園 —庭園研究者・造園家 森蘊と建築家 堀口捨己・西澤文隆—」『神戸山手大学紀要』第17号 pp.9-40 2015.12.20
田中栄治 2016 「庭園研究者・造園家 森蘊と建築家 谷口吉郎 —昭和前半期における建築家と造園家の交流—」『神戸山手大学紀要』第18号 pp.59-87 2016.12.20
西澤文隆 1978a 「庭への履歴書」『庭』第39号 1978(昭和53)年4月号 建築資料研究所 pp.74-79
西澤文隆 1978b 「私の感銘の受けた図書」『建築雑誌』Vol.93 No.1142 昭和53年10月号 日本建築学会 p.7
藤岡通夫他 1953 「森蘊氏提出学位請求論文審査報告」藤岡通夫・谷口吉郎・加茂儀一 東京工業大学
マレス・エマニュエル 2013 「日本庭園史と森蘊の業績 —毛越寺庭園の復元・整備を通して—」『奈良文化財研究所紀要』2013年 pp.38-39
森蘊 1953 『桂離宮の研究』東京工業大学学位請求論文(博士論文) 昭和28年12月26日工学博士授与
森蘊 1983 「建築と庭園の結びつきを求めて」『建築雑誌』vol.98 No.1211 1983(昭和58)年9月号 p.20